

光と闇と

—— 古典に見られる霊をめぐって ——

松岡 香

I はじめに

萩原朔太郎の詩集『月に吠える』の中に、次のような詩が収められている。

竹^①

光る地面に竹が生え

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいにほそらみ、

根の先より纖毛が生え、

かすかにけぶる纖毛が生え、

かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりと、

青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

「光る地面」に生える竹は、「まつしぐらに」「凍れる節節りん」と空に向かう。その姿は潔く凜凜しく、ひたむきなものを感じさせる。では、それを支える地下の根はどうだろう。根は根で「しだいにほそらみ」ながら広がっていき、「かすかにけぶる纖毛」が細くか弱く、しかも確実にふえ続けていくのである。高みを目指して一心に伸びる竹と、罪・背徳のイメージを漂わせながら広がっていく竹の根。一方は光を仰ぎ、他方は闇を見つめる——。しかも、相反する筈のそれら二つのものが合わさって初めて一本の「竹」が存在するという事実は、我々を肅然とさせずにはおかない。なぜなら、我々はその竹の姿に、人の「魂」「こころ」の在り方を重ねるからである。

古来、人はひたすら伸びようと上を見上げる一方で、深く沈潜し、己の心の闇を見つめ続けてもきた。そして、その心の闇に潜むものに対するおびえが夜の闇の恐怖と結びつき、死霊・生霊を信ずる姿勢を生み出すことになった。この稿では『万葉集』と『源氏物語』

の中から霊にまつわるものを取り上げ、それらをもとに古代の人々の心の中の「光と闇」について考えてみたい。

II 『万葉集』に見られる死者の魂

(有間皇子に関する歌から)

『万葉集』には、柿本人麻呂の数々の殯宮の歌をはじめとして、鎮魂の歌が多く収められている。万葉の時代、人々は靈魂を「タマ」と呼び、その「タマ」は

○霊体であつて人間にも自然物にも内在するもの

○遊離し浮動するもの

○憑依するもの

○分割し増殖するもの

と考へていた^②。そして、死者の内在魂がその体から遊離してさまよふのおさえるために、ねんごろに死者の霊を鎮める儀式を行なつた。儀式には歌が必要である。言葉の力を借りて「死者の霊が発現する過剰な威力を統御^③」しようとしたのである。これら鎮魂の歌は「挽歌」として、集中大きな割合を占めている。

言葉の呪力で浮遊する霊を鎮めようとすれば、必然的にその内容は故人の生前の徳を偲び、別れを悲しみつつも安らかであれと祈る思いに終始することになる。その典型が柿本人麻呂の作品であろう。持統天皇の傍らにあつて多くの皇族の死を目のあたりにしてきた人麻呂は、莊重に雄大に言葉を駆使し、悲しみの感情を盛り上げた。多田一臣氏は鎮魂の呪力の担い手として「宗教者、芸能者に近い存在、歌よみのような存在^④」を挙げているが、「歌俳優^⑤」人麻呂は、

その条件の二つを兼ね備え、挽歌の世界に君臨したのである。

こうして出来上がった人麻呂の挽歌には、当然のことながら浮遊する靈魂の存在は感じられない。人麻呂によつて崇められ、ひたすら嘆きをもつて偲ばれた魂は、死者の中にとどまつて鎮まるよりほかに方法がなかったのである。これは他の挽歌にもあてはまる。人麻呂の挽歌の一つの典型とし、その影響を受けた他の歌人たちも魂を浮遊させまいとして似たような形の歌を残した。『万葉集』に挽歌は多いが、靈魂がさまよう内容をもつた歌は意外に少ない。少ないものの中で、最初に登場するのが有間皇子を悼んで歌われた山上憶良の作品である。

山上憶良、追ひて和ふる歌一首

鳥翔成あり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ^⑥

(巻二一 一四五)

孝徳天皇の遺児である有間皇子は、政權をめぐる微妙な立場にあつたがために死なねばならなかつた悲劇の皇子として知られている。蘇我赤兄に唆かされた彼は、斉明四(六五八)年反逆を企てたとして捕えられ、一九歳の若さで絞首された。これは自然死ではなく異常な死に方であり、皇子の残した歌を通して強く人々の心に印象づけられた。

有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらばまた還り見む

(巻二一 一四二)

家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

(巻二一 一四二)

松の枝を結ぶのは当時の習俗で、幸福や無事を祈る意味を持つていたらしい。一種の儀礼であつたわけだが、同じ場所で行なう

した中皇命の歌

君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな

(巻一—一〇)

と比較してみると、「眞幸くあらば」という仮定表現の切実な響きに改めて驚かされる。不本意な死を迎えようとしながら、万に一つの僥倖を願う皇子の生への執着が切なく迫ってくるのである。

天皇に反逆を企てたとして絞首された有間皇子であるから、鎮魂の儀礼は行なわれず、従って生前を偲ぶ歌も残されてはいない。それだけになおさら、皇子の霊の浮遊は後の人々に強く信じこまれていったのではないか。皇子の死後四十余年を経て、山上憶良は皇子の魂が「あり通ひ(いつも通つて)」と、今もなおさまよい続けていることを強調している。そして、そんな皇子の無念さを、皇子が祈りをこめて結んだ松は承知していると歌うのである。常緑で樹齡の永いことから呪力を持つているとされてきた松の木をもち出すことにより、憶良は皇子を死に追いやった政治権力を批判したのかもしれない。

ここで、山上憶良について触れてみたい。『万葉集』巻五に収められている「沈痾自哀文」の中で憶良は「初沈_レ痾已来 年月稍多 是時年七十有四 鬢髮斑白 筋力尫羸」と老いて病に悩む自身を嘆いている。この文章が天平五(七三三)年に書かれていることから逆算すれば、憶良の生年は斉明六(六六〇)年頃、有間皇子の死から約二年後ということになる。出自については、帰化人説、粟田氏との関係を説くものなど種々の論があるが、

- 舍人として宮廷に出仕し、下積み生活を長く経験したこと
- 遣唐少録に拔擢されて唐に赴き、漢籍・仏典の素養を深めたこと
- 帰国後伯耆国守に任ぜられ、律令政治の理想と現実の困窮との矛盾

盾を実際に確認したこと

○東宮侍講に任命され、次代の天皇に唐風の学問を講ずる機会を得たこと

○老齢になって「天ざる鄙」筑紫に赴き、大伴旅人という知識人、歌人と身近に接することができたこと

○宿痾に悩み続けたこと

といった「のがれるすべもない(負)」と僥倖にも近い(正)とが交錯^⑧する波乱の人生を歩んだところに特徴がある。これらの経験により、彼は他の歌人とは違った視点でものを見、歌を詠むことになった。大岡信氏が指摘しているように、憶良ほど自然の風物に関心を持たず、人生、それも貧・老・病・死といった暗い面のみを積極的に歌にした歌人はいない^⑨。憶良は「コンプレックスにみちた知識人」だったのである。

憶良は、自らも痛みを持つ者として、他者の痛みにも同情と共感を寄せた。「貧窮問答歌」(巻五—八九二)はその典型であるが、その中で憶良は「風雜り 雨降る夜の 雨雜り 雪降る夜は 術もな く」と歌っている。貧窮という暗い淵に立つ者にとつて、夜の闇は一段と濃く、深く、冷たい。憶良の眼は闇の底で喘ぐ人間の苦しみをみえる。そして彼は、「この世は生まれてくるに値するものだったのか、この人生は生きるに値するものか」と問い続けるのである。下積み生活の後に唐に渡るといふ幸運を掴み、徳治主義の光を浴びた憶良だからこそ一層身に沁みた闇の深さであろう。

先述の「山上臣憶良追和歌一首」(巻二—一四五)に関して「鎮魂の伝統には立ちながら自己抑制の動く論理には(中略)ひとりの人間の運命的な生死とその霊魂について、もの(形代)の現在によせる複雑な認識と批評とがあった」という指摘がある。中大兄皇子

という大きな渦に巻きこまれ、陰謀の罪を被せられて亡くなった皇子の靈魂は、鎮められることもなく中有の闇をさまよっている。そうした囚われた魂の存在を理解し、皇子の魂を安らかな境地に導こうと思いたったのは、憶良のみであり、それは憶良が、自身も強く意識している人の心の闇の部分を追求することに、殊の外熱意を抱いていたことの表われではないだろうか。

文明四（六五八）年といえ、巫女的な性格を持つ宮廷歌人、額田王の活躍した時期である。有間皇子は伯母である斉明天皇に近い存在であった。温泉治療で狂疾を癒した皇子が、女帝の行幸を促したとも考えられる。とすれば、斉明天皇を通じて有間皇子が額田王を知っていた可能性は大きい。有間皇子の事件を知った天皇の驚きと悲しみも、これまた強く額田王に響いたことであろう。しかし、額田は、有間皇子に関する歌を残してはいないのである。勿論額田の立場を考えればそれは当然といえる。天皇に反逆しようとした皇子は罪人であり、その死は禁忌の対象なのだ。がしかし、それらを考慮に入れなかったとしてもやはり額田は、有間皇子を悼む歌を歌わなかったのではないか。残された彼女の歌の数々が、そう感じさせるのである。

額田王については、以前に考察を加えたが、天智天皇の殯の折の歌を再度とりあげてみたい。

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首
やすみしし わご大君の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡
の山に 夜はも 夜のことごと 晝はも 日のことごと 哭のみ
を 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別れなむ

（巻二―一五五）

額田王は天智天皇の思いをそのままに感じとることのできる女性

であった。共に生を共有し、時代を共有してきた筈の額田が、天皇の死に際しては非常に冷静な歌いぶりで大宮人たちの様子を歌っている。「山科の鏡の山」に鎮まった天皇を思い、日夜嘆き続けている大宮人たちの、殯が過ぎれば彼らはまた生者としての日常にたち返っていく……。いくら権力者として人々の頂点に立ち、多くの者に周囲を守られていた天皇であっても、一度幽明境を異にしてしまえば抗うことはできない。生まれたときと同じく一人で鎮まっていくなのである。生者と死者とがはつきりと分かれた瞬間を、額田はしっかりと見すえて歌に表現した。そんな額田もまた生者であり、生を共有することはできても死を共有することはできないと、この瞬間に明確に意識するのである。額田にとって、死は動かせない事実として認識されるものであったろう。近江遷都もまだ完成の域に達してはおらず、大海人皇子が天下を掌握するかもしれないときに死なねばならない天智の無念も執着も、全てを呑みこむほど死は大きなものであった。仮にそのような不本意な死を迎えた天智の靈魂が浮遊したとしても、何ほどのことがあろう。二度と以前の天智が戻ることはないのだ。額田はそう考えていたのではないだろうか。

更に付け加えるならば、額田は「吾」にこだわる人間であった。「吾」という言葉は歌の中に何度も出てくるし、「吾」の字のない歌であっても、その中には額田の姿がはつきりと浮かび上がってくる。私は、そうした額田を「自我意識を有する人間」ととらえてきたが、その点から考えても、有間皇子の死を身近な衝撃として受け止めることはなかったのではないかと思うのである。

先述したように、有間皇子は狂疾を抱えていた。そして、温泉治療によって治癒したところを蘇我赤兄に唆かされ、反逆計画の張本

人にされてしまう。中大兄皇子の前に連行され罪を問われたとき、皇子は「天と赤兄と知る。吾全ら知らず^⑧。」と訴えている。そこに見られるのは、終始一貫「吾」を持たない一人の人間である。父の死後誰からの庇護を頼りにすることもできなかった皇子ではあるが、余りにたやすく時代の波に流されすぎはしなかったろうか。天智のさまざまな罫をいち早く見抜き、先手を打って対処する大海人皇子のような決断力、生命力に欠けてはいなかったろうか。死に際してなお「吾全ら知らず」と訴えた有間皇子の姿は切ないが、「吾」のない人間の弱さを感じさせるのである。これは、事あるごとに「吾」を明らかにし、自分の意志を言葉に表わしてはばからなかった額田王にとって、一体感を持ち得ないものであっただろうと思う。哀れな皇子の運命に同情はしても、自身の思いを重ねることはできなかったのではあるまいか。額田は巫女的な存在として神の霊を信じ、その「吾」をも信じていた。信じる対象を持つ者の強さを感じさせる額田であるからこそ、有間皇子の霊を慰撫し鎮める歌を作ることにはなかったと考えるのである。

以上、有間皇子の靈魂をめぐって考察してきた。異常な死を遂げた皇子の霊の存在を身近にとらえ、皇子と一体化してその靈魂を慰めるためには、同じような痛みを持った人間でなくてはならない。それは人麻呂でも額田でもなく、山上憶良でなければならなかった。人間の暗い面を見すえ、生の意味を問いつけた憶良であるから、有間皇子の悩みを共有することが可能だったのである。

III 『源氏物語』に見られる霊

(六条御息所の生霊をめぐって)

『万葉集』の時代、人々は日の神（アマテラス）を信仰し、陽の光の中で活動した。一日は日の出と共に始まり、日没で終わったのである。夜は神の世界であり、従って黄泉の国からやって来る靈魂が浮遊し、神が活動する神聖な時刻となっていた。しかし、律令政治が形骸化しつつあった平安中期以降、人間の活動は夜に移行しはじめる。藤原一族を頂点とする上層貴族たちによって執られた政治は「朝政」から「夜儀」へと移り、^⑨灯火の下でさまざまのことが決断された。政治面だけでなく文化面についても同様である。当時、文化の中心は天皇の寵を争う後宮の女性たちであったが、彼女たちの日常も夜に重点が置かれている。「宮にはじめてまゐりたるころ、物のはづかしきことのかずしらず、涙もおちぬべければ、夜くまゐりて、三尺のみき丁のうしろにさぶらふに、絵などとりいでて見せさせ給を、手にてもえさし出づまじう、わりなし。『これはとあり、かゝり。それが、かれが』などの給はす。高坏にまゐらせたる大殿油なれば、髪の手など中くひるよりも顕証にみえてまばゆけれど、念じて見などす。(略) 暁にはとく下りなんといそがる。『葛城の神もしばし』など仰せらるゝを、いかでかはすぢかひ御覽ぜられんとて、猶ふしたれば、御格子もまゐらず。』(一七七段)と、宮仕えの初めの頃を初々しく恥じらいながら過ごした清少納言もすぐに華やかな雰囲気慣れ、「あそびはよる。人の顔みえぬほど。』(二〇〇段)「夜中ばかりに、廊にいでて人よべば、『下るゝか。いでをくらん』との給へば、裳、唐衣は屏風にうちかけていくに、月のいみじうあかく、御直衣のいと白うみゆるに、指貫を長

うふみしだきて、袖をひかへて『たうるな』といひて、おはするまゝに、『遊子、猶残の月に行』と誦し給へる、又いみじうめでたし』^⑦（二九三段）と述べて宮中の夜の華やかな雰囲気を生き生きと描いている。

こうして貴族たちの日常生活が夜に傾いていくにつれて、灯火の届かない陰に対する恐怖も増大していった。最初から一筋の光もささない真の暗闇も確かに人間の恐怖心をかきたてる。が、それ以上に怖いのは、光の中にいて外の闇を見つめるときではないだろうか。明るさに慣れた目には、光の届かない片隈の暗さがひとときわ異様なものとして映るものである。また、この平安時代には、それまで以上に特定の人間に富が集中し、貧富の差が広がった。貴族の社会でも政権をめぐる争いが熾烈になり、呪詛や怨嗟の声が絶えず人を不安におとし入れるようになる。それらの結果、人は灯火の下に集まって各種の遊びに興じながら、或いは政権を掌握しようとして画策しながら、部屋に限の暗がりには得体の知れないものが潜んでいるような幻覚に怯え始めるのである。そうして、「物の怪」の存在がにわかにはクロースアップされることになる。

「物の怪」のモノとは、タマに対して用いられる言葉で、ネガティブな精霊を総称したものである。^⑧ 悲業の死を遂げた者や怨みのうちに死んでいった者たちの霊が成仏できずに中有をさまよい、人々に災いや病苦をもたらすのが「物の怪」現象であり、天変地異や疫病などは全て物の怪によるものとされた。数々の禁忌で人々の生活を縛り上げる陰陽道や秘かに他人の不幸を願う密教が浸透した社会は、こうした物の怪が跳梁する土壤を作り上げるのに役立った。宮中の朝議において、物の怪現象と陰陽道とを重視することが打ち出されて以後は嵯峨帝が推進してきた儒教的合理主義が後退し、物

の怪が世の中をいよいよ不安なものにするべく飛び回ることになる。この時代に書かれた作品には、フィクション、ノンフィクションの別なく、物の怪に関する記述が多い。それらの殆んどが死霊をとり上げている中で、『源氏物語』は初めて生霊を登場させている。ここでは、その六条御息所の生霊について考えてみることにする。

六条御息所は前春宮妃。源氏より七歳年長の彼女は教養豊かで格式の高い女性であり、深く源氏を愛しながらも自分の執着の強さを隠そうとして直截に源氏と接することをためらう人間として描かれている。年齢的な不調和を恥じる気持ちもあつて余計に自制を強める御息所であつたが、その「あまりなるまで、思ししめたる御心さま」^⑨は源氏にとっては重荷となっている。物語に登場した時点で既に源氏にとって些か気重なる存在となつてこの高貴な女性は、他の女性と会つているときにもしばしば源氏を後ろめたい気持ちにさせる。偶然に出会つた夕顔にのめりこみながら源氏は「かつは『あやしの心や。六條わたりにも、いかに思ひ亂れ給ふらん。うらみられんに、苦しいことわりなり』と、いとほしきすぢは、まづ、思ひ聞え給ふ。何心もなきさしむかひを、『あはれ』と思すまゝに『あまり心深く、みる人も、苦しき御有様を、少し取り捨てばや』と、思ひくらべられ給ひける」^⑩（夕顔）と嘆息する。御息所のことを思い、「いとほし（気の毒だ）」と同情しつつも、傍らの夕顔の可愛い様子と比較しないではいられない。そして、そんな自身に罪悪感を抱く源氏である。そうこうするうちに、夕顔が何物かにとり殺されるようにして変死を遂げるのであるが、その部分は以下のよう描かれている。「すこし寝入りたまへるに、御枕上に、いと、をかしげなる女あて、『おのが、『いと、めでたし』と見たてまつるをば、たづね思ほさで、かく、ことなる事なき人を、率ておはして、

時めかし給ふこそ、いと目ざましく、つらけれ』とて、この、御かたはらの人を『かき起さんとす』と、見給ふ。ものにおそはるゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。』(『夕顔』)闇の中に現われる物の怪が調伏されなどして名乗って特定の人物の生霊と分かれれば、それは物の怪ではなく「御霊」と呼ばれることになる。この場面では、怪しいものの正体は判然としない。源氏の夢に現われた「いと、をかしげなる女」の語る内容から、御息所ではないかと想像されるにすぎない。慌てた源氏が紙燭を持って来させて夕顔を見たときにも、「枕上に、夢に見えつるかたちしたる女、面影に見えて、ふと、消え失せぬ。」(『夕顔』)とあるように、源氏一人の目にある女性の姿が見え、かき消えたことになっている。夕顔の死因がその女性によるものか、その女性が本当に御息所の生霊であるのかなどといったことはわからないままである。

この事件があつて後、源氏はいよいよ六条御息所をうとうとしく思うようになる。御息所は源氏の心が自分を遠く離れていることを悟り、斎宮に立った娘について伊勢下向を決意する。彼女は、自分の意志で源氏から離れようとする理性を持った女性なのである。ところが、斎院の御禊の日、行列を見物しようと忍んで出かけた御息所は葵の上の車とぶつかって争いを起こし、乗った車を大破されてしまう。ここに至って御息所は自制を失うほどにプライドを傷つけられるのである。「いみじく妬き事、限りなし。」「又なう、人わろく、くやしう、『なにゝ來つらん』と思ふ」「おしけたれる有様、こよなう思さる。』(『葵』)とあるのを見てもわかるように、ここでの御息所は恥ずかしさと口惜しさで狂わんばかりの有様である。気付かずに通り過ぎた源氏も恨めしく「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいと知らるゝ」と泣く姿からは、それまで

の自己抑制のきいた格式の高い女性としての御息所は感じられない。この車争いの後、彼女は鬱々と楽しまない日を送る。以前より一段と懊悩は深く、「御心地も、うきたるやうに思されて、なやまし」く思い煩う日々を重ねるのである。物語は御息所の内心の懊悩を、幾度となく表現をかえて繰り返す。後に没する生霊の執念深さを暗示しているとも考えられる描写に、読者は自失の状態にある御息所の心の傷の深さに改めて気付かされるのである。

やがて葵の上の出産。御息所の心はいよいよ穏やかではない。葵の上の産褥の床に現われる物の怪、生霊の噂を聞くにつけても自身の抑えようのない恨みが恐ろしく、「人を『悪しかれ』など思ふ心もなければ、物思ふに、あくがるなる魂は、さもやあらん」(『葵』)と自己暗示の地獄に堕ちていく御息所は、やがて夢に「かの、ひめ君と思しき人の、いと清らにてある所に行きて、とかく、ひきまさぐり、うつゝにも似ず、たけく厳きひたぶる心いできて、うちかなぐる」自身の姿を見るようになる。洗っても洗っても髪や肌に染みついた芥子(邪氣を払うために焚く護摩に用いる)の香の幻覚、人の噂。怨恨を抱く相手に災いがかかるようにと祈る呪詛と違い、彼女の場合は葵の上にとり憑こうという意志を持つていたわけではない。恨みや嫉妬の念が、ひとりでにさまよい出てしまうのだ。聡明で本来は理性的な御息所は、誰にも話すことのできない自分の心の中の闇の囚われ人となっていく。

夕顔にとりつこうとした怪しげなものは、殆んど人の噂にはのぼらなかつた。しかし、この葵の出産の場面に跳梁する物の怪について、作者は「この御息所、二條君などばかりこそは、おしなべての様には、おぼしたらざめれば、恨みの心も深かるらめ」と女房たちにささやかせている。愛恋が高じての嫉妬によるものと周囲が決め

つけているのである。こういった種類の噂の伝播力は大きい。抑制できない自身の心に対する不安を募らせていた御息所にとつて、この周囲の思惑は自己暗示に拍車をかけるものとなったであろう。そして、そんな御息所の弱った心に最後の打撃を与えたのは、源氏であつた。御息所からの見舞いの手紙に対して源氏は「とまる身も消えしもおなじ露の世に心おくらん程ぞはかなき（はかない露のようなこの世の中に、執着するのはつまらない）」と答え、つけ加えて「かつは、おぼし消ちてよかし。『御らむぜずもや』とて、これにも」〔葵〕と記す。葵の上の周囲にたち現れる生霊を御息所のもものと確認したのは源氏であり、そのあさましい姿を見ればやはり「見た」と口走らずにはいらなかったのであろう。源氏からの返事を受け取った御息所は「ほのめかし給へるけしきを、心の鬼に、しるくみ給ひて、『さればよ』とおぼす」ことになる。この場面に用いられている「心の鬼」とは疑心暗鬼の心を言う。「この『心の鬼』には、抑制し、物事に耐え得る勁い理性もありながら、なおそれを斥けるだけの情念をもつて調和を失った自己の、矛盾をみせてしまった自己の、情理いづれにも責任をもたなければならないのにもちかねてゐる者の哀しそうな足摺りを見る思いがする。嘆きの声を聞く思いがする。」という指摘もあるように、收拾のつかない不安や恐れを感じ情を「鬼」という表現にこめているのである。人よりも理性の面においてまさっていると自負していた御息所の不安や自責の念は、彼女を根底から揺さぶることになる。結局、彼女ははつきりとした自覚を持たないまま、自身を恥じ、物の怪と思ひこんでいくのである。しかし、葵の上の産褥の床に現われたのは、本当に御息所の生霊であつたのだろうか。その部分は、本文では「〔略〕かく参り來むとも更に思はぬを。物思ふ人のたましひは、げに、あくがるゝ物に

なむありける」となつかしげにいひて、嘆きわび空にみだるゝ我がたまを結びとゞめよしたがひのつまとの給ふ聲・けはひ、その人にもあらず、かはり給へり。『いと怪し』と思しめぐらすに、たゞ、かの御息所なりけり。あさまじう、人の、とかくいふを、『よからぬものどもの、言ひ出る事』と、聞きにくゝ思ひて、の給ひ消つを、『目にはみすゝ、世には、かゝることこそは、ありけれ』と、うとまじうなりぬ。『あな心う』と思されて、『かくの給へど、誰とこそ知らね。たしかに、のたまへ』との給へば、たゞ、それなる御有様に、『あさまし』とは、世の常なり。〔葵〕とある。確かに〔夕顔〕の巻とは違い、生霊は御息所であると名のつてもゐる。しかし、注目すべきは、今回もその生霊と対面したのは源氏一人であるという事実ではないか。葵の上のときも、他の女房たちの近づく気配がすると、生霊は声をひそめてしまふ。御息所の「恨みの心も深かるらめ」とささやき合う女房たちの前には姿を現わさず、噂を否定しようとしている筈の源氏の前にはのみ本性を示すというのは、どういうことであらうか。

『葵』の冒頭、六条御息所への訪れが間遠になっている源氏に対して、父桐壺院は「人のため、恥ぢがましき事なく、いづれをも、なだらかに、もてなして、女のうらみな負ひそ」と叱責している。身分が高く、従つて愛されて当然の女性を疎略に扱うのは、それ自体が罪であつた。もともと御息所に対する自分の接し方を後ろめたく思つていた源氏である。父院のこの訓戒は痛く心に食いこんだことであらう。それでいて、やはり源氏は変わらない。「かく、院にもきこしめし、の給はするに、人の御名も、わがためも、すぎがましう、いとほしきに、いとゞ、やむごとなく、心苦しきすぢには、思ひ聞え給へど、まだ、あらはれては、わざと、もてなし聞え給は

ず。『葵』と本文は続く。後ろめたく思っても、態度は変わらない。というより、変えられないのだ。理性がいくら命令しても、人の心の奥底に潜むものを変えることは難しい。そういう意味において、源氏は御息所に負い目を持ち続けていたということになる。

加えて、源氏にはまだ負い目があった。藤壺の宮に対する思慕の情と、その結果犯してしまった不義である。これもまた、許されない恋であることをよく承知していながら、感情の奔流に押し流されてしまった結果によるもので、源氏は己の心を抑制することができなかった。心の闇に潜むものにつき動かされてしまったのだ。そうして片方では父院に対する罪の意識、天に対する罪の意識に悩まされ続け、心の闇をさらに混沌としたものにしていくのである。報われない恋に思いを焦がし、それを抑制することができない点において、源氏は御息所と同じく「心の鬼」に悩み苦しむ人間であったのだ。

源氏が、程度こそ違うが思いを寄せて応えてもらえなかった女性、それまでに二人いた。空蟬と藤壺の宮とである。どちらも深い思いで源氏を愛しながらも、身分を考え、立場を熟知して自分から進んで遠ざかった。この世の光を一身に集めたような源氏の魔力から危く身を守ることができたのである。源氏の恨みがましい恋心はこの二人の女性、特に藤壺の宮の周囲に濃厚に漂ったと思うが、しかしこれら二人の女性は、自分が拒んだ相手の霊に苦しめられてはいない。意志の力、理性の力で彼女たちは、心の鬼を闇の底に封じこめたからである。あえて、自らの心の奥にあるものをのぞきこみ、ひきずり出そうとはしなかったのである。空蟬は夫を思い、源氏を思つて恋の芽を摘んだ。藤壺の宮は、若宮と源氏のことを考えて、髪をおろした。自分のことにのみとらわれるのではなく、相手を含めて他の人のことを本当に考えるときに、心の鬼は封じこめら

れ、妄執はおさまるのかもしれない。六条の御息所はそれをしようとして果たせず、自責の念の虜になった。源氏は源氏で、心の鬼につき動かされ、御息所への負い目がそれを御息所の霊と錯覚させる結果になった。『源氏物語』に登場する御息所の生霊とは、御息所の自責が高じての自己暗示と、源氏の自責が高じての幻覚とが合わさったものではないのだろうか。

竹西寛子氏は、『源氏物語』の作者紫式部と夫藤原宣孝の歌のやりとりをひき、「わが身を責める『鬼』をよびすまわせるのは、他人ならぬ自分自身であつて、自責を免れる行為の、価値規準についての認識はありながら、われにもあらずそれに背いてしまふ無念と怖れをあらわす語の一つとして『心の鬼』を見ると、『死霊』とも、『物の怪』とも、また『想像上の恐しい生物』や『邪見の女』としても使われている『鬼』なる一語が、人の心によびすまわせられることによつて、じつに微妙な表情で活用されていたのを知られるのである^⑤」と述べている。この場合には「心の鬼」は疑心暗鬼というよりも良心の呵責に置き換えた方が分かり易い。いずれにしても、恨みをもった者の霊は、恨まれて当然と思う心と呼応し合つて生まれるものではないだろうか。そしてそれは、夜の闇の中で生活の重要な部分を過ごした王朝人の恐怖と巧みに結びついたものと見るのである。

IV ま と め

生別であれ死別であれ、山上憶良は「別れ」を歌い、哀しみを言葉にした。「おしなべて憶良が格別な興味をもつて画きだしたもの

は、人生別離のさまざまなかたちであつた^②と指摘されるとおりである。苦しみや悲しみを繰り返しつつ「別れ」を経験するのが生の実相であり、その重苦しさゆえになおさら生は重みを増すということとを、憶良は自分の体験の中から会得していったのであろう。そして、憶良は死の深い淵を通り抜けて、不滅の魂を幻視するようになる。自らの望まぬ死を与えられ、無念を抱えて浮遊を続ける有間皇子の魂を身近なものとして受け止め、同情をこめて歌にした憶良。「生死存亡の根元^③」を求めることに強く執着した憶良は、自分の魂もまたこの世に生きる意味を問い続けてさまよう魂であることを予感したのかもしれない。憶良の歌には、冥暗の中で生きる人間の、確かな光を求めて苦しむ姿が描かれている。

一方、『源氏物語』はどうか。六条御息所はしばしば源氏の前に生霊として現れる。御息所の霊に出会うたびに源氏は大切な女性を失い、不幸の涙を流すのである。しかも、御息所自身もその霊を羞恥し、呪わしく思う。徳高く、人々の尊敬を集めてきた御息所が実は抑制できない「心の鬼」に振りまわされる存在であるということとは、読者に改めて人間の不可思議さを感じさせる。同じことは源氏にもあてはまる。「光る君」ともてはやされ、「國の親となりて、帝王の、上なき位にのぼるべき相おはします人」（「桐壺」）と讃えられた源氏は、この世の光を一身に集めたような存在であつた。しかし、光り輝いているこの源氏であつても、人生は喜びに満ちたものではない。全ての人に仰がれながら、彼も御息所と同様に、心の闇に怪しいものを抱え、それに振り回されていた。御息所は輝かしい源氏の陰影となつていくようなのだが、実は源氏の暗闇の部分を引き出していただけなのかもしれない。彼女の靈魂は源氏を不安におとし、いれ、「光源氏の世界の内部を暗くさしのぞくような批判性をも

たらし、（略）無明の闇の中から物語の世界を見つめ^④」ようにする。宮仕えの日常の中に人の心の鬼を見、灯火の届かぬ世界を感じ続けた紫式部の、人間を見つめる視線がそこにはある。

古代の人々が実在を信じ、恐れてきた靈魂の浮遊は、つきつめていけば、さまよう人とそれを幻視する人との苦しみ、哀しみにたどりつく。苦痛や涙を伴わない喜びはなく、影を持たない光もない。陽に照らされた人生の大道を描くのみでなく、陽にあたることのない闇の部分も正しく把握することが、文学の重要な役割であり、それは昔も今も変わることがない。靈魂を見、靈魂に踊らされてきた人々を描く古代の作品の中に、私は、不変のテーマ、「文学の芯」とも呼ぶべきものを見る思いがする。

註及び参考文献

- ① 『萩原朔太郎全集』筑摩書房（1975）
- ② 桜井満編『万葉集民俗事典』（『万葉集必携』）學燈社（1979）参照
- ③ 多田一臣『万葉歌の表現』明治書院（1991）
- ④ 前掲書③
- ⑤ 伊藤博『萬葉集の歌人と作品』塙書房（1979）
- ⑥ 『萬葉集』日本古典文學大系 岩波書店による。文中の他の歌の引用も全て同書からのものである。
- ⑦ 村山出「山上憶良の生涯」（『萬葉集講座第六卷』）有精堂（1972）参照
- ⑧ 大久間喜一郎・森淳司・針原孝之編『万葉集歌人事典』雄山閣（1992）

光と闇と—古典に見られる霊をめぐる—

- ⑨ 大岡信『万葉集』 岩波書店(1985) 参照
- ⑩ 前掲書⑨
- ⑪ 前掲書⑨
- ⑫ 田村圓澄「万葉集と仏教」(『萬集集講座第二卷』) 有精堂(1973)
- ⑬ 松岡香「額田王と柿本人麻呂」北陸学院短期大学研究紀要第25号(1993) 参照
- ⑭ 前掲論文⑬
- ⑮ 『日本書紀』日本古典文学大系 岩波書店
- ⑯ 前掲書③参照
- ⑰ 『枕草子』新日本古典文学大系 岩波書店
- ⑱ 藤原克己「もののけ・御霊」(『國文學』 第三〇卷一〇号 學燈社(1985))
- ⑲ 前掲論文⑱参照
- ⑳ 『源氏物語』日本古典文学大系 岩波書店による。本文中の他の『源氏物語』の引用も全て、同書によるものである。
- ㉑ 藤本勝義『源氏物語の△物の怪▽』 笠間書院(1994) 及び前掲論文⑱参照
- ㉒ 前掲書㉑参照
- ㉓ 竹西寛子『王朝文学とつき合う』 新潮社(1988)
- ㉔ 「亡き人にかごとをかけてわづらふも己が心の鬼にやはあらむ」(紫式部)と「ことわりや君が心の闇なれば鬼の影とはしるく見ゆらむ」(藤原宣孝)を指す。出典は『紫式部集』による。
- ㉕ 前掲書㉓
- ㉖ 井村哲夫「山上憶良の作品」前掲書⑦
- ㉗ 前掲論文⑫
- ㉘ 森一郎「平安貴族の生活」(『源氏物語手鏡』) 新潮社(1990)